

「いま」が遠りつくところ、バッハ

なぜ、バッハなのか

坂本 このシリーズは *schola*^{スコラ} といって、これはラテン語で「学校」という意味ですが、僕たちがこれだけは聴いてほしいと思うような、いろいろな音楽を扱っていく企画です。聴いてほしい、というのは、はじめてクラシックに接する子どもや、いままで何となく興味はあったけどよく聴いてこなかったという方たちに、僕たちが聴いてもらいたいと思うものを選曲していくことですね。今回はその第1弾として、バッハを取り上げることにしました。

なぜ、*schola* シリーズの最初にバッハを選ぶのかといえば、それはいま僕らが聴いたり作ったりしている音楽を遡^{さかのぼ}っていった時に、大体バッハ辺り、バッハ一人とは言わないけど、バッハが生きていた時代までは、現代と繋がっているからなんです。難しい言葉でいえば、同じパラダイムの上に乗っかって、現代のポップスや R & B なども含めて、音楽のシステムとしては、バッハが使っていた音楽の言葉と、ほとん

ど変わらないものを使って僕らは音楽を作っていると言うことができます。

これがバッハよりも前になると、そういう共通性が少し薄れてきて、もつとヨーロッパ・ローカルの言葉、方言のようなものになっていくんですが、なぜかバッハの時代にひとつの普遍性を持って、それが現在まで繋がる源泉として続いてきた、ということですね。

浅田 そうですね。なぜ school かというと、旧来の堅苦しいクラシック音楽のカノン(正典)なんていうのは忘れた方がいいけれど、だからといって、何でもありだ、バッハもあればポップスもあつてそれらが全部等価だ、という風になつてしまうと、逆にどこから音楽にアプローチしていいのかわからなくなる、そこでもう一度、みんなが出発点として一応持っていた方がいいだろうと思われる新しいカノンを作り出す必要があり、そのための場として school があるということだと思えます。英文学でいえばシェイクスピアとかエリオットとか、日本文学でいえば『源氏物語』とか夏目漱石とか。音楽におけるその対応物ですね。

坂本 「標準」ですね。これは読んでおいてよ、という。

浅田 そう、「標準」であると同時に、いま触れても新鮮で面白い。グレン・グールド*が漱石の『草枕』の英訳をラジオで朗読しているけれど*(笑)、読んでみると下

手な現代文学より面白いんですね。だから、何でもありだ、何でも等価だ、ということとはなくて、やっぱりバッハは凄いな、漱石は凄いな、と。ただ、それをかしまつて勉強するのではなく、たとえばグールドが自由奔放にバッハを弾き漱石を読む、そういうフレッシュなたちで甦らせるということですね。そういう意味でも、バッハから始めざるをえないということでしょう。

♪1 カンタータ第140番「目覚めよ、とわれらに声が呼びかける」BWV 140〜コーラル
「シオンは物見らの歌うを聞けり」

坂本 バッハは非常にメロディ・メイカーとしての側面があつて、親しみやすい、歌いやすいメロディを作っています。この曲なんかはまさにそうですね。有名な曲ですけれど、こうしてあらためて聴いても、やはりいい曲です。器楽の前奏があつて、歌のメロディが入ってきて、器楽のメロディが背景として使われながら、2つの異なるメロディが一緒に進行していきます。

小沼 「中心にメロディがあつて、それ以外は伴奏」という発想でできているわけではないんですね。複数のものが同時に進行している。これらのどちらを聴いてもよくて、同時に、両方が一緒になつてこそそのサウンドでもあるという。

■グレン・グールド (1928〜1982)
カナダのピアニスト。バッハ作品の革新的な解釈と演奏で知られる。1964年以降はコンサート活動を引退し、レコード・著作・テレビ出演などを通して音楽活動を展開した。

■『草枕』の英訳を、1981年12月、CBC制作のラジオ番組で第一章の抜粋を朗読した。